

早速番組を拝見したいと思います。

両方とも、テーマを「遺伝と環境」にしました。アメリカのテレコースの「遺伝と環境」の番組、これは三十分のシリーズの中の一本です。

田中先生の「知能と創造性」の中の〈遺伝と環境〉、これは十五本から成り立つシリーズの中の一本です。

番組視聴

1 The Growing Years

2 知能と創造性

二つの番組を見ていただきました。昨日午後の第二セッションで6つの型を提示し

ていただきました試作番組との関連で申しますと、きょう拝見した二つの番組は、それぞれ「ナレーターの解説によるドキュメントの型」と「スタジオ型」に近いもののように拝見したわけです。

「映像と印刷教材の組み合わせに関する比較研究」——心理学の場合——ということで、いま拝見いたしました映像、それから、資料集に収録及び翻訳して載っております印刷教材と、どう結びつけていけば教育効果が一層上がるのか、問題はそこにくると思うのであります。このテーマについて、太田先生から問題提起をいただきたいと思っています。

対照的なアプローチ

太田（お茶の水女子大学） ただいま遺伝と環境について二つのテレビジョンの番組を拝見いたしまして、映像と印刷教材の関係を論ずるわけですが、このテーマはいずれも大変映像化しにくいテーマであろうと思います。材料が非常に得にくいテーマであったと思います。それをコースト・コミュニティー・カレッジのテレコースの方では大変いろいろな映像を並べて、たとえばその中には、ヘマンサスという植物の細胞分裂が出ておりましたけれども、あの映像は実は日本で撮ろうと思っても撮れないような映像ですが、そういうものを使って、何とかして遺伝と環境というものを絵で綴ろうとしている感じがいたします。

これは欧米型のテレビジョンのあり方でございまして、たとえばイギリスの公開大学の番組でも、テーマは違いますが、大体同じような手法が多い。ナレーションが多くて、あのような形式をとっているようです。恐らく、印刷教材がきわめて完備している場合にああいうやり方が使えるのでして、印刷教材が完備していない場合にはあのようなやり方は余りできない。つまり、大きく分けていき

ますと、通信的な印刷教材が非常に完備している状況においては、興味づけですとか、問題の重要な点とか、視点を明らかにするという意味では、あのようなドキュメンタリー・タッチに近いようなやり方が使えるわけです。

ところが、日本人は、あれなら、テレビを見なくたって、印刷教材さえ勉強すれば目標は達成されるのだと考えるおそれがあります。なるほど、あのテレビはおもしろいかもしれないけれども、私は忙しいからテレビなんか見なくて、こっちだけ勉強すればそれでいいんじゃないかというところが起こりがちのように思っています。

起こりがちと申しますのは、これはほかの例ですけれども、従来通信高校の講座でテレビを併用した場合にも、印刷教材が非常に完備しておりまして、映像を見なくともできる場合には、映像の視聴率が大変低いのであります。

したがって、こうしたテレビのつくり方、つまり印刷教材が完備した場合に映像がどういう面を受け持つかという点では、考えてみなければならない問題が大変あると思いますし、その場合に、恐らく興味づけとか学習のモチベーションを高めるとか、そういうことをねらっているんだろうと思いますが、この方法を現在の放送大学でとれるかどうかというのは、疑問があると思います。

二つの番組がまことに対照的であると申しましたのは、テレコースではたとえば文字パターンでございますとか曲線ですとか、説明に関するものを一切使っておりません。代表的なのは、たしかバートのデータの説明をしながら、バートの本は出ましたけれども、バートのデータ表が全然出ない。もし日本でやりましたら、バートがこういいましたというと、少なくともバートのデータ表ぐらいは出たろうと思います。そういう点ではきわめて映像優先型のテレビジョンのあり方ではなかったかと思えます。

こうしたテレビは、一般の人に学習意欲を起こさせたり、こういうことをやっているんだということを知らせるためには有効であるとは思いますが、学習者、つまりそれによってあるクレジットを得ようというような目的の人の場合にどれだけ有効であるのか。あるいは、あれを見ながら大づかみはできますから、後はテキストを読めばいいわけですが、テレコース式の場合は印刷教材が完備し

ている場合にのみ使える方法ではないかと思います。

一方、田中先生の番組は、ストレート・トーク型の典型的なものです。お話を承っておりますと大変よく説明はわかりますし、この印刷教材を拝見いたしますと、データなども印刷教材に余り細かく出ておりませんので、印刷教材を補完して内容をよく知らせるという意味では学習目的には合っていると思います。けれども、今度は、テレビを見るという立場に立ちますと、大変失礼ですが、あれならラジオでよかったのではないかという疑問が、当然出てくるように思います。

初めに申しましたように、知能と遺伝というのは大変映像化しにくいものでございまして、映像化しようとするれば、テレコースのように映像と内容とを直接結びつけず、むしろバックに映像を流しているような感じの番組になりがちだと思います。たとえば田中先生がストレート・トークをなさっている背景ぐらいでも、ある程度の工夫をいたしませんと、今度は視聴者の方では、この番組をなぜ見なければならぬかというところで、四十五分かかりますと、飽きてしまうようなこともある。ストレート・トーク型の番組は、放送大学の印刷教材の関連を考えますと、相当これからこちらの方が多くなるとは思いますけれども、もう少し映像的な処理をしないと、見ている人の方の興味づけ、あるいは学習意欲というものが高まらないのではないだろうか、という感じがいたします。

私は、日ごろ印刷教材と映像との関係というのは、必ずしも一義的には決まらないのではないかと考えております。大きくいいますと、印刷教材が完備している場合には、映像は確かにそれを補完するという程度でいいのかもしれませんが、仮に印刷教材がそれほど完備していない、それほど大きなものをとれない場合に映像はどうするのかというときにも、いろいろな役割り分担があるように思います。

たとえばモチベーションを高めるという役割り分担もありますし、印刷教材で扱う内容全体には触れないで、部分的なところだけを強調していくとか、あるいはこれは映像本来の持っている現在の情報を補っていく。現在と申しましても何年間かあるわけですが、アップ・トゥー・デートの情報を画面に入れるとか、具体的な例を入れるというようなことがいろいろあると思います。スタディ

ーガイドなりテキストブックを読めば、それでも映像を見なくてもいいのではないかと思わせるのは、困ったことだと思います。

ややまとまらない話をいたしました。私は、映像と印刷教材の関係というのは一義的には決まらないのだと思っております。いろんなケースがございますし、ある場合には双方が重複してもいいし、あるいは重複しなくて、相補って一つの学習形態をつくってもいいのであって、とにかく学習の構造の中で、映像の位置づけと印刷教材の位置づけが非常にはっきりとして、しかもそれが学習者にわかればそれでいいのではないか。それがどうも明確でなくて、片方が中心過ぎて、片方がやや補助的になり過ぎたりいたしますと、むしろそれは要らないという意見が出てくるのではないかと思います。

それから、映像というものは、映像そのものが引きつけるということをねらうべきだと思います。それにしては、テレコースの番組は、個々の場面は非常におもしろかったんですけども、しかし、全体として、映像の流れと番組のねらいがどういうふうに合っているのかと考えなおしますと、疑問の点を大分感じました。バックの素材を大変苦労してつくったということはわかりますが、果たしてこれを見たときに、見終わった人がどの程度遺伝と環境というような問題についての知識が得られたのかという点では、何となく見終わってしまうようなおそれも感じたわけです。

こういう点で、問題提起にならないかもしれませんが、印刷教材と映像のあり方というのは一義的に決まらないのではないか。そして、それを余り一義的に決めるということも問題でございますが、さりとて、どちらかはなくてもいいというような形に、特に映像はなくてもいいというような形にしないために、やはり興味があきる、そして映像でなければできない問題——これは、自然科学なんかになりますと、映像でなければとうてい提示し得ない問題がございますけれども——それから、できるだけ現在に近い情報を映像の中に入れていくということが望ましいのではないかと思います。

司会 太田先生の提案をいただきました。木下先生の発題をお願いします。

自然なものの魅力と力